



平成23年度 セントラルパーク構想提言業務  
資料編

平成24年 3月  
安藤忠雄建築研究所



## 『心を咲かせる』 浜松市民の心のセントラルパーク

市制100周年を迎えた浜松市。浜松城公園を中心としたセントラルパーク構想は、魅力あるまちづくりの象徴となる事業です。ここでは浜松城をはじめとした、既存の魅力ある都市資産を最大限に活かしたまちづくり、浜松の歴史を踏まえつつ、これからの100年を超えていける公園を提案します。

浜松の都市景観はよく整備されていて美しいのですが、都市全体のまとまりを欠いている印象を受けます。この状況を改善するためには、この公園が地域全体をまとめるシンボル、つまり『セントラルパーク』となって、景観と文化を人々の生活へとつなげることが重要です。

浜松城公園の持つ『場の力』は決して弱いものではありません。浜松城はもちろんのこと、公園全体をとり巻く地形、名所と呼ばれるほどの桜、趣のある池など、今あるものの良さを最大限に活かし、引き出すことで、『浜松城公園らしさ』を継承したセントラルパークを提案することができると思います。

観光客の誘引も浜松にとっての大きな目標ではありますが、なによりもまず、そこに住まう人々が自分たちのまちに誇りをもてるような、市民主導型のまちづくりを目指します。そうすればまち全体に活力がみなぎり、魅力が高まることで、自ずと外からも人々が集まるでしょう。

市民とともにセントラルパークが成長していくという思いをもってもらうために、花や緑を市民に育ててもらうシステムがあっても良いのではないかと考えています。街路樹や公園内の植物の一部を市民自らが育てることで、市民の公園や都市に対する愛着は増すことでしょう。そのときセントラルパークは浜松市民にとっての心のシンボルとなり、『心のセントラルパーク』が完成します。



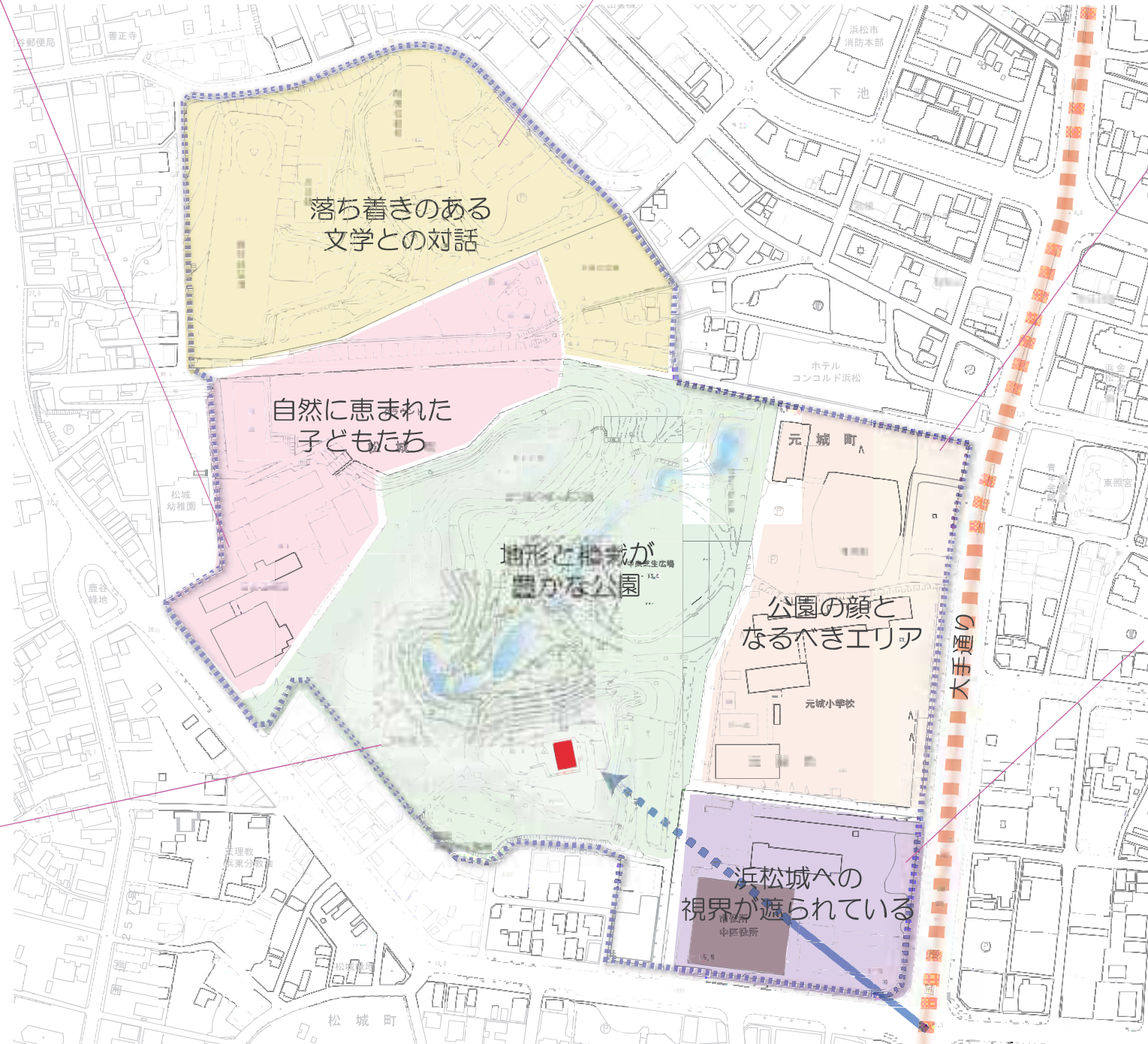


■ **自然に恵まれた子どもたち**  
 小中一貫校は自然豊かな公園に隣接することになります。浜松の子どもたちと自然を結びつけ、セントラルパークを浜松の未来へとつないでいく、**ソフトとしての提案**が必要であると考えました。

■ **落ち着いた文学との対話**  
 文芸館と茶室のある北側のエリアは、浜松城のある南側のエリアとは異なり、本を読むことなどに適した**落ち着いた文学との対話**として捉えました。**両者の対比を際立てる**ことで、公園の表情がより豊かに感じられるようになります。



■ **地形と植栽が豊かな公園**  
 浜松城公園を特徴付けているのは、**浜松城**とその廻りの石垣が折り重なって生み出される**立体的な地形**でしょう。ですがこの公園の長所は何も浜松城だけではありません。城から**三日月状に高台の地形**がつながっており、優れた眺望が得られるほか、**池・水路**もこの公園の雰囲気作りに寄与しています。**桜**も植えられ、植生も豊かです。こうしたせっかくの敷地の長所を軽視せず、積極的に活かしていくことが、『**浜松城公園らしさ**』をもった新しいセントラルパークを計画する上で重要ではないかと考えました。



■ **公園の顔となるべきエリア**  
 浜松駅からつながる大手通り沿いは、**この公園の顔となるべき重要なエリア**です。通りを移動する人々に対して訴え続けるような、通りに沿った仕掛けが必要であると考えました。それは**通りから浜松城への見え方**について考えることへとつながります。



■ **浜松城への視界が遮られている**  
 現状では市役所が**都市から浜松城への視界**を遮っていますが、これも都市の顔としてのセントラルパークを計画していくに当たっては解決しなければならない問題点です。





セントラルパークのアイデア

■浜松城公園の記憶を継承する

既存の浜松城公園の良さを活かし、この場所を尊重した3つのコンセプトを軸に計画を行います。

1. 地形 — 立体公園

現状の公園では、三日月形の高台が展望広場から美術館前、浜松城へとつながっていく構成となっています。この地形を活かすため、新しい**美術館をこの傾斜面に埋め込む**ことを提案します。建物は分割され、屋上庭園が地形から顔を出し、高台と結ばれながら立体的な公園をつくります。

浜松城の周りは地形、塀の配置などを考慮しながら、**ひな壇状の庭園**を整備します。段ごとに違う花を植えるなどの工夫をし、遠景からでも楽しめるランドスケープを計画します。

2. 桜・松 — ゲート広場・桜並木

古くから日本人の心をとらえ、浜松城公園の象徴でもある桜と、浜松市の木である松を利用することで、公園の魅力を一層引き出します。

大手通りに面した、セントラルパークの新たな顔となる一角は、桜や松を植え、『**ゲート広場**』として整備することを提案します。このゲート広場は背後の浜松城の景観を引き立て、人々を公園へと誘導します。

このゲート広場から公園内部、または周辺の通りへと歩いていける**桜並木**も合わせて整備し、**公園と都市をつなげます**。

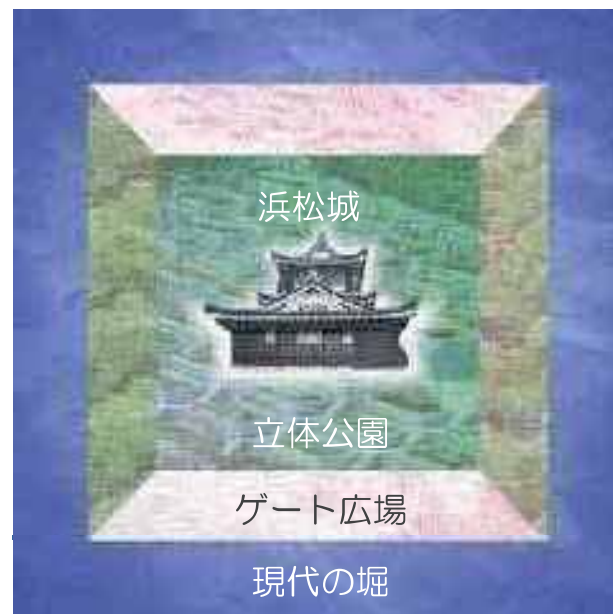
3. 水 — 現代の堀

浜松城の周りにはかつて堀が巡らされており、城独特の風景をつくっていました。ここでは城の堀を現代的に解釈し、『**現代の堀**』としてつくりなおすことを提案します。浜松城は堀をもち、『現代の浜松城』としての風情ある情景が生まれます。現代の堀は浜松城公園内の水を引き込むところから大手通り沿いを巡り、都市の水際の風景をつくります。

■浜松城を3つのレイヤーでくるむ

以上3つの敷地から生み出されたコンセプトによって、浜松城は『**立体公園**』『**樹木（桜・松）**』『**水**』という3つのレイヤーによってくるまれることとなります。こうして**ドレスアップされた浜松城**は、**地域のシンボル**として、より力強く、印象的にその存在感を示してくれるでしょう。

3つのレイヤーの境界には、居心地の良い空間が生まれます。立体庭園の麓や、穏やかな水際に人々は集まり、春には桜を楽しみます。





# ゾーニング案

## 落ち着いた文芸との対話

### 文学の庭

北側には茶室を中心とした日本庭園があります。この日本庭園を残し、さらに周辺へと拡張していくことを提案します。竹林で覆って都市との関わりを抑えることで、独立した落ち着いた世界をつくりだします。この庭で人々は本を読み、自分と、そして自然と対話します。都市の中心に位置する、市民が浜松への愛着を深めるための静かな庭です。

## 恵まれた自然環境に隣接

### 小中一貫校

「今あるものを活かす」という考え方にしがたって、校舎の新築を必要最小限にとどめ、現状の校舎のリノベーションを中心とした計画とします。屋上をブリッジでつなぎ、屋上植栽を施すことで、眺望の得られる屋上の校庭をつくっても良いかもしれません。

## 人々が寄り添い集う

### イベント広場

ゲート広場とつながる広場。現在の芝生広場を活用し、憩いに、スポーツに、様々なイベントに、より市民の気軽な利用や創造的な活動を支えるため、環境の充実を図ります。ゲート広場同様に、災害時用の機能を備えます。

## 歴史と文化が出会う

### 歴史エリア

浜松城天守閣を中心としたエリアは、浜松に脈々と流れてきた時間・歴史を感じ、楽しむことができる歴史公園として再生します。浜松城の持つ高い歴史性を尊重し、発掘調査等の成果を踏まえた上で、それらを有効に再現・活用し、後世に継承します。その成立の基礎となった、変化に富んだ自然地形を利用し、敷地の高低差や石垣に沿って、緑豊かなひな壇状の庭園を整備します。

### 浜松インフォメーションセンター

休憩スペースとしての機能も持った浜松を紹介する施設をつくります。屋上は立体公園の一部として取り込まれます。

### 桜並木

浜松城から周辺へと歩いていける桜並木を整備します。桜の下を歩くという行為を通じて、街とセントラルパークはつながります。

賑やかな公園と、落ち着いた育みの庭とを桜並木でつなぎ、道路を跨ぐブリッジを設けます。

## 起伏にとんだ緑豊かな公園 公園エリア

日本庭園の周りの起伏に富んだ緑豊かな公園エリアは、市民の憩いの場として、四季折々、より魅力あふれる公園とします。また、既存の豊かな起伏を活用し、平面的な広がりだけではなく、いくつかの魅力が立体的につながっていく立体公園（庭園）として整備します。美術館等の施設機能が必要な場合も、地形に埋め込み、屋上を公園と一体化して結ぶことで、風景を損なうことなく、回遊性のある変化に富んだ公園空間を創出することができます。

## 現代の堀

かつて城独特の風景を生み出していた堀を現代版に解釈した水路をつくります。

## 駐車場（文化センター地下）

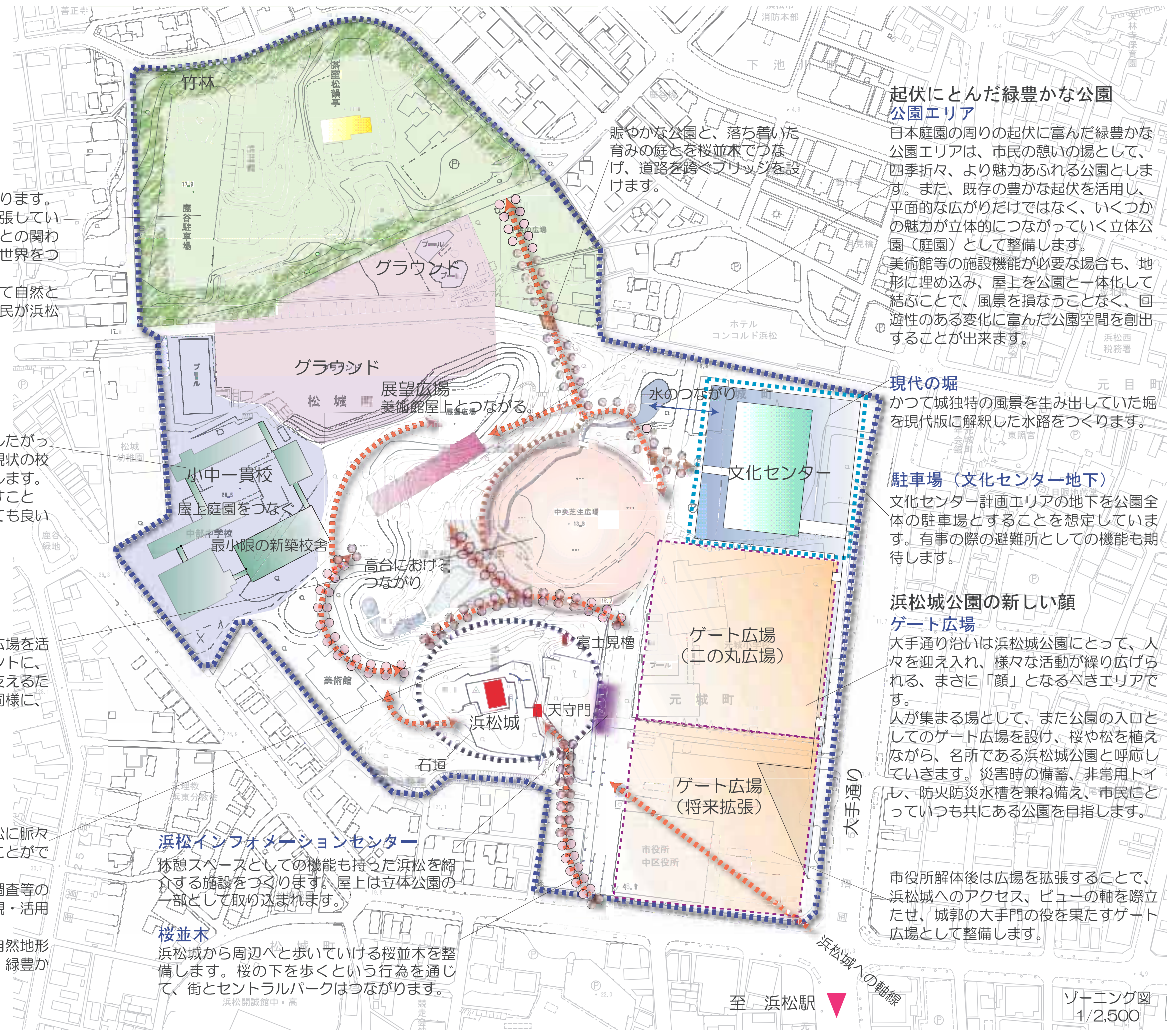
文化センター計画エリアの地下を公園全体の駐車場とすることを想定しています。有事の際の避難所としての機能も期待します。

## 浜松城公園の新しい顔

### ゲート広場

大手通り沿いは浜松城公園にとって、人々を迎え入れ、様々な活動が繰り広げられる、まさに「顔」となるべきエリアです。人が集まる場として、また公園の入口としてのゲート広場を設け、桜や松を植えながら、名所である浜松城公園と呼応していきます。災害時の備蓄、非常用トイレ、防火防災水槽を兼ね備え、市民にとっていつも共にある公園を目指します。

市役所解体後は広場を拡張することで、浜松城へのアクセス、ビューの軸を際立たせ、城郭の大手門の役を果たすゲート広場として整備します。





### 浜松駅から並木通で結ぶ

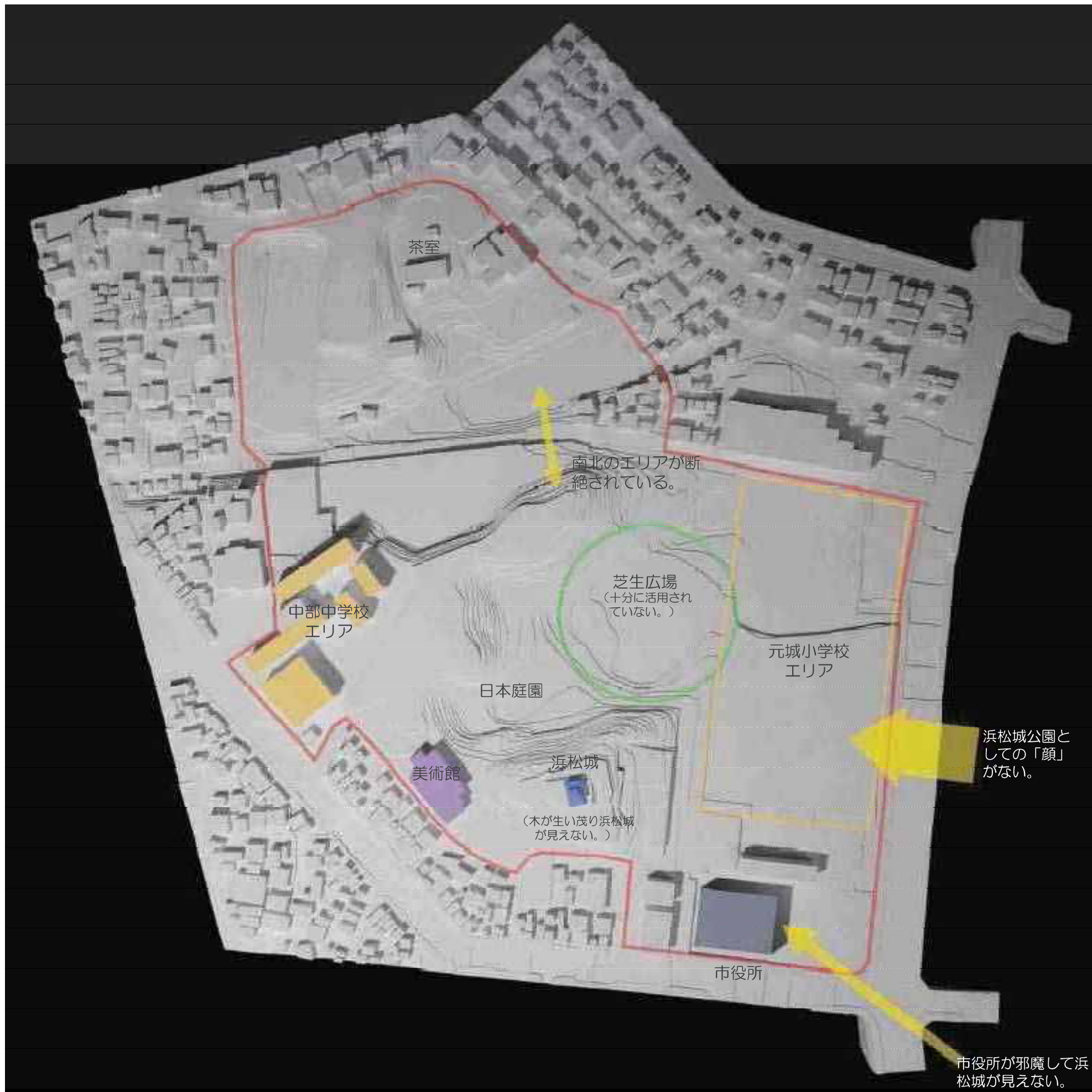
商業の中心である浜松駅からまちのシンボルであるセントラルパーク・浜松城公園へと、より一層人の流れを生み出すため、例えば桜並木を整備するなどして、都市の拠点と拠点を特徴あるネットワークで結びます。桜の下を歩くという体験が、浜松という都市の新たな軸となります。

このほか、都市の公共性の高い施設や、歴史的に重要な施設などを、桜をはじめとした街路樹のネットワークで結んだり、花壇やプランターを用いて街路を草花で彩るなどすることで、人とまちの新たなるネットワークをつくり、都市を活性化することができます。

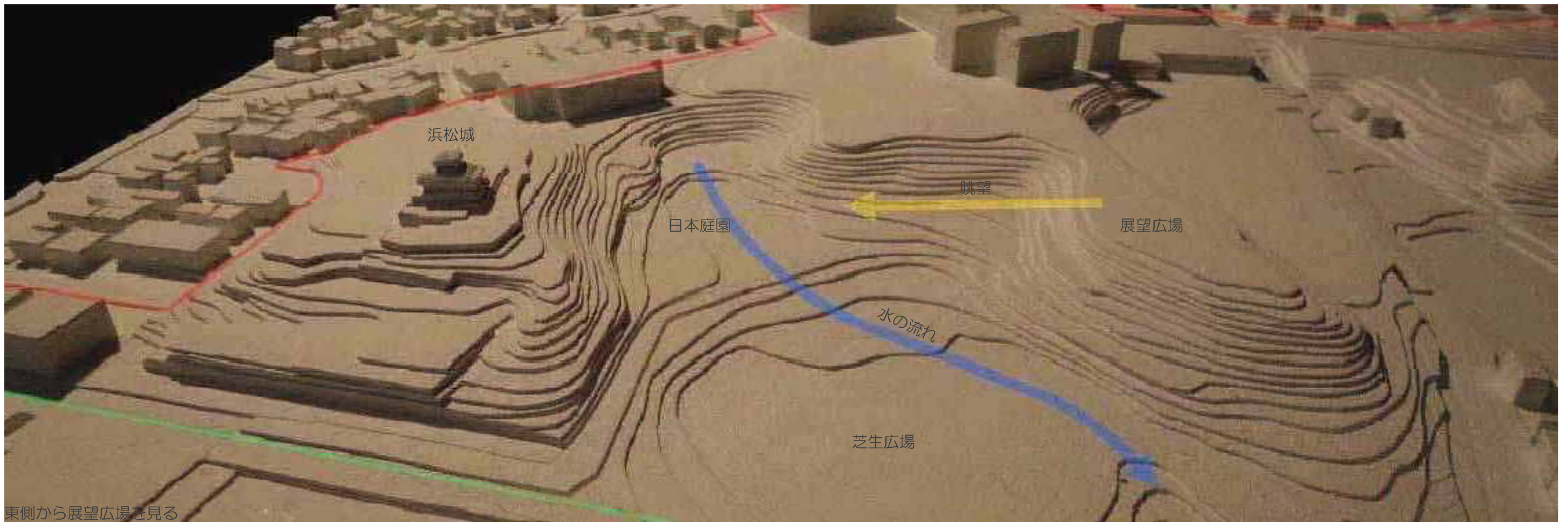
木を植えたり、草花を管理したりするにあたっては、市民の積極的な参加を募ります。そうすることで、人々の公園や都市に対する愛着は増し、セントラルパークはより一層、市民にとっての心のシンボルへと近づきます。













類似実績 1

さくら広場

桜と水景の事例

大阪で展開している桜の植樹運動をきっかけに、日本の大手電気産業メーカーの、社有地を活かした地域貢献プロジェクトとして始まった、一面を桜が覆う広場の計画である。

2006年、まず千葉県郊外の湾岸地域・幕張と、大阪の門真に2つの「さくら広場」が誕生し、翌年に神奈川の茅ヶ崎、翌々年に大阪の豊中市と、現時点で4箇所の敷地に実現している。

企業として掲げていた目標は「環境」と「地域貢献」。さくら（ソメイヨシノ）をシンボルとして展開しながら、それぞれの公園に雨水利用、太陽電池、風力発電、災害時一時避難所、非常用便所など地域に応じた工夫があり、特に茅ヶ崎・豊中は工場に付随する緑地の活用であるため、地元への貢献ということが意識された。

「さくら広場」は、それぞれの広大な敷地に、文字通り桜をグリッドに沿って植えただけのシンプルな構成である。

春にはやさしく穏やかな桜色で覆われ、冬には整然と立ち木の並ぶ、厳しくも美しい風景をつくりだす——各地の「さくら広場」の樹木が育ち、真の意味で完成を迎えるには、それぞれに最短でも5年の年月がかかる。それを育てるのは、事業者だけではない。公園の利用者となる近隣住民の仕事だ。

「さくら広場」が、地域の環境アメニティの向上とともに、コミュニティの育成にもつながっていくことを期待している。



さくら広場（幕張）



さくら広場（門真）



さくら広場（豊中）



さくら広場（豊中）



類似実績 2

桜の会 平成の通り抜け

桜並木の事例

大阪の活性化を目的とする、街の中心部の河川敷を対象とした桜の植樹運動。街は自分たちの手でつくる——独立独歩の大阪精神をたよりに、一ロ一円で市民募金を呼びかけ、約52,000余りの賛意が集まった。

2004年から計画は始まり、6年間をかけ、毛馬・桜ノ宮から中之島一帯を中心とした大阪府下全域に当初目標の3,000本の植樹を達成した。植えられた樹の幹には、募金者の名前が刻まれたプレートがかけられる。

また2009年からは、この活動の一環として、河川敷に桜を植えるスペースのないエリアの環境美化の手段として、川沿いに建つビル壁面、護岸の緑化運動も進めている。水辺に面するツタを這わせ、川から見る風景を緑に染めていく。ビル所有者の協力により、土佐堀川対岸の建物から始められている。淀川から天保山まで約15km、世界最長の桜の風景の完成が水の都、大阪の復活を告げる。

所在地:大阪府 日本

活動期間: 2004 - 2010





類似実績3  
長尾小学校

子どもたちが植物を育てた事例

学習の場としてのみならず、出会い・交流の場として、子供たちが様々な体験を通じて、自分で物事を考えることができるきっかけとなるように設計された小学校である。

ここでは子どもたちに自分たちの手で数万個のドングリを拾ってもらい、苗木として育て、学校の敷地に植樹して森をつくる活動に取り組んでもらうことを提案した。苗木が育つまで3年間、それを定着させるまでにもう3年間かかるため、一年生のときにドングリを拾った子どもは卒業するまでの6年間でドングリの森が成長する過程をしっかりと体験する事ができる。この活動を通して彼らが命あるものを育てることの苦労と、その重みを知り、愛情を持つようになってくれればと願っている。

所在地: 兵庫県神戸市  
活動期間: 2007 -





類似実績 4

淡路夢舞台

立体公園の事例

敷地は兵庫県淡路島、明石海峡寄りの海岸部に位置する。国営公園、県立公園を含む「淡路島国際公園都市」の中核施設として計画された、文化複合体である。

全長1km、広さ28ヘクタールに及び広大な「夢舞台」の敷地は、かつて大阪湾埋め立てに供する土砂採掘地としてあった場所だった。山を丸ごと削り取られた跡に残されていたのは、赤茶けた岩盤がむき出しの、無残な土地の風景——。「夢舞台」は、この人間の営為により傷ついた大地の蘇生を主題として構想され、プロジェクトは建物より先に、まず周囲の斜面地に苗木を植えることから始まった。つくること自体を目的とした巷の再開発事業とは、その出発点からまったく異なる視座を「夢舞台」はもっていたのである。

そうして人間の手で回復された緑の斜面地に、会議場、ホテル、店舗、温室、野外劇場からなる全長800mの複雑な建築複合体が埋め込まれている。驚くべき大規模の計画であるが、中を歩く人々に、そのスケールを実感する機会は訪れない。それぞれの施設のヴォリュームが敷地内に分散して、地形をなぞるように控え目に配置されている上に、その間の余白が、徹底して分節された、人間的尺度の空間の重ね合わせとしてつくられているからだ。

所在地: 兵庫県淡路島  
設計期間: 1993/10-1996/12  
施工期間: 1997/07-1999/12  
敷地面積: 28 ha  
延床面積: 109,000 sqM





類似実績5

直島 地中美術館

美術館の事例

敷地は瀬戸内海の小島、直島につくられた美術館である。「地中美術館」と名づけられた建物には、印象派のクロード・モネと現代美術のウォルター・デ・マリア、ジェームズ・タレルという3作家の作品が永久展示されている。

敷地は直島の段状塩田の遺構が刻まれた小高い丘の上に位置する。その場所のポテンシャルと〈空間アートの永久展示〉という特殊なプログラムを踏まえ、ここでは〈風景に溶け込む建築〉という、完全なる〈地中建築〉を提案した。

建物は、丘の上に、海へと向かう南北の軸線に沿って穿たれた、正方形と正三角形平面を象るふたつのヴォイドを基点として構成される。海より遠い側に位置する正方形の「四角コート」の1辺に沿うかたちで、丘の中腹より地中に入り込むアプローチの坑道が突き刺さる。「四角コート」を巡る階段が導くひとつ上の地下レベルに、角度を振ってエントランスロビーが配される。

3作家のアートスペースは、「三角コート」の2辺を取り巻くかたちで、それぞれに固有の幾何学的ヴォリュームをもつ。アートスペースへと至る一連の地中空間の主題は、〈光〉である。地下に埋め込まれた幾何学形態の連なりが生み出す暗闇の迷路——そこに差し込む光の量感と質感、その階調によって、非日常の場に相応しい、抑揚ある空間を生み出そうと意図した。

3つのアートスペースは、アーティスト及びディレクターとの妥協のないコラボレーションを経て生まれたものである。その激しい対話の痕跡が、地中の建築の輪郭として、地表面にわずかに顔を覗かせている。

所在地: 香川県香川郡直島  
設計期間: 2000/08-2002/03  
施工期間: 2002/04-2004/06  
敷地面積: 9,990 sqM  
延床面積: 2,573 sqM



ウォルター・デ・マリア スペース



クロード・モネ スペース



福武総一郎さんから直島を芸術の島にしたいという構想を初めて聞いたのは1988年のことだ。しかし当時、長らく石や砂利等の建築資材の採掘場となっていた直島は、工場から排出される亜硫酸ガスの影響で緑が失われ、無残なはげ山と化していた。そのような荒廃した直島を前に福武さんは「美しい海と環境を取り戻し、世界の一流芸術家たちの表現の場とすることで、芸術愛好家や学生たちが集う島にしたい」と言う。福武さんの強い信念に引っ張られ、私たちははげ山に苗木を植える活動を地道に進めながら、美術館やホテルの建築設計に携わってきた。

1998年に始まった直島・家プロジェクトとは、この地に残る古い伝統的な民家などを修復・保存して、現代アートを永久的に展示するためのギャラリーとして利用する試みである。第1番目の「角屋」では、修復された築250年の民家に、宮島達男の作品が収められている。私たちはその2番目となる「南寺」に関わる機会を得て、ジェームズ・タレルのための間の空間を用意した。

島民たちの住む穏やかな町に、アートの作品が展示される——計画が発表された当初は、島民から反対の声が上がった。だが島に人が訪れるようになるにつれて、島民は民宿や喫茶店、レストランを営むようになった。70歳を超える人々が、家の前に暖簾を出している。島民は次第に自分の島に誇りを持つようになった。

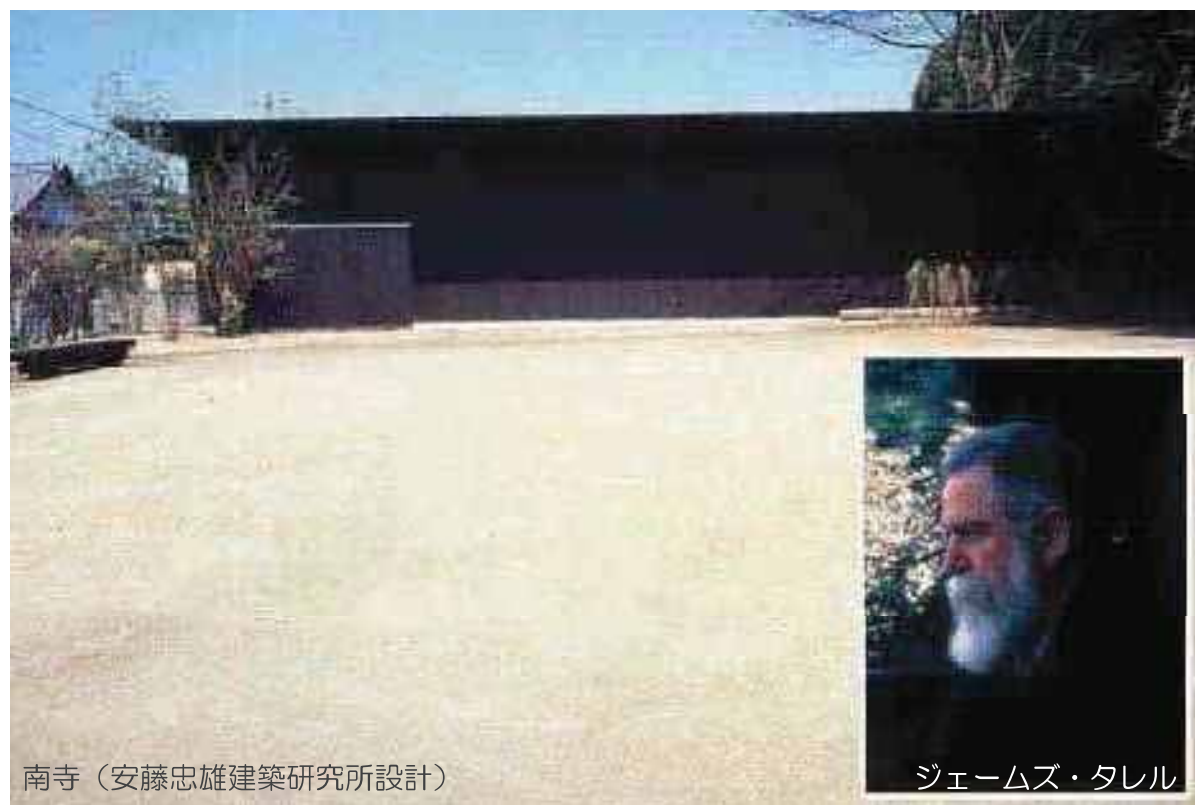
アートは島民と深く結びつき、町に無くてはならない存在となった。島民たちの心から変革を起こした、まちづくりの良い事例である。



角屋 宮島達男



角屋 宮島達男



南寺（安藤忠雄建築研究所設計）

ジェームズ・タレル



きんざ 内藤礼



きんざ 内藤礼



参考事例

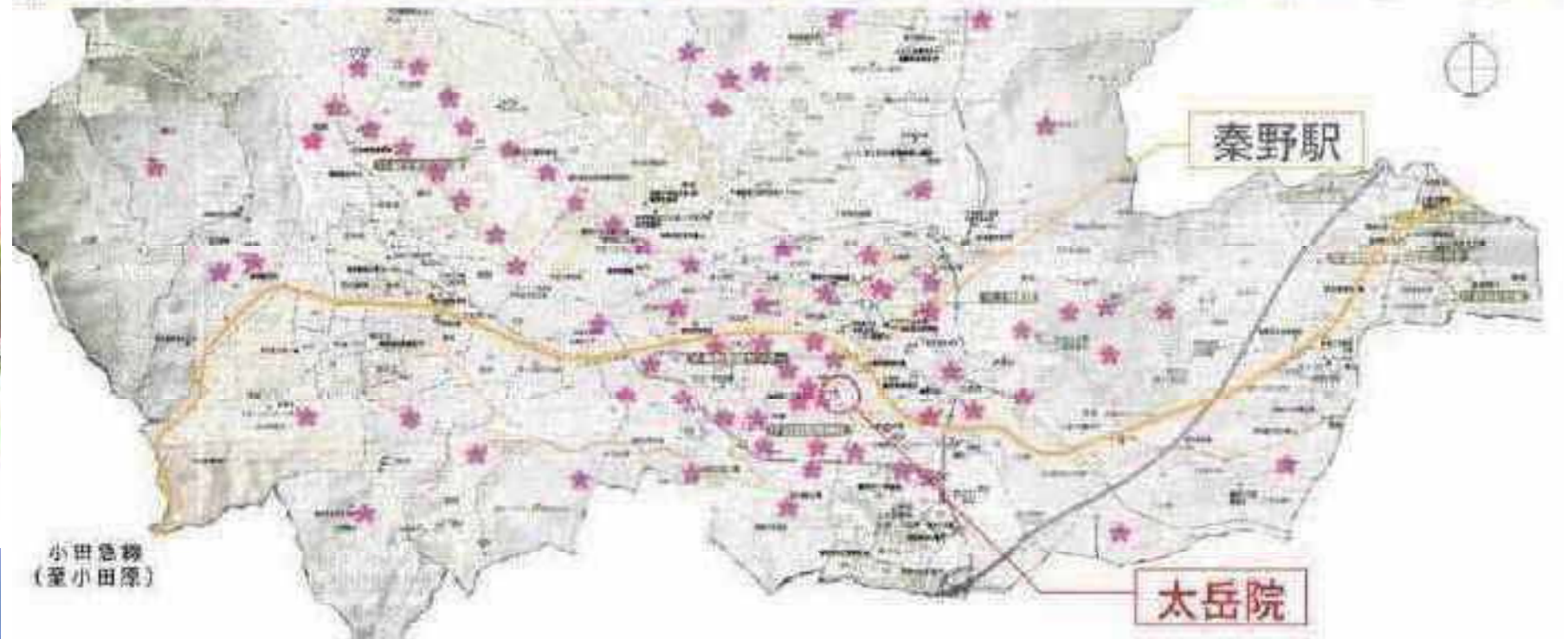
太岳院

地域住民による桜の植樹の事例

太岳院は、神奈川県秦野にある曹洞宗の寺院である。人々が寄り添い、集まる空間として、象徴的な大屋根を持った寺院を計画した。地域社会の中で宗教的な意味合いだけでなく、教育、文化推進、福祉の役割を担ってきた「お寺」という場を、再度「パブリック」な場所としてとらえなおし、この施設を核に民間・行政・老若男女を超えた交流が生まれ、共に生きていくことが期待された。

ここでは檀家の寄付で、寺院の境内だけでなく、周辺地域も対象として様々な種類の桜を植えた。地域の人々が思いを一つにして「集いの場」づくりに携わった。

所在地: 神奈川県秦野市  
設計期間: 2002/10-2006/07  
施工期間: 2006/10-2007/10





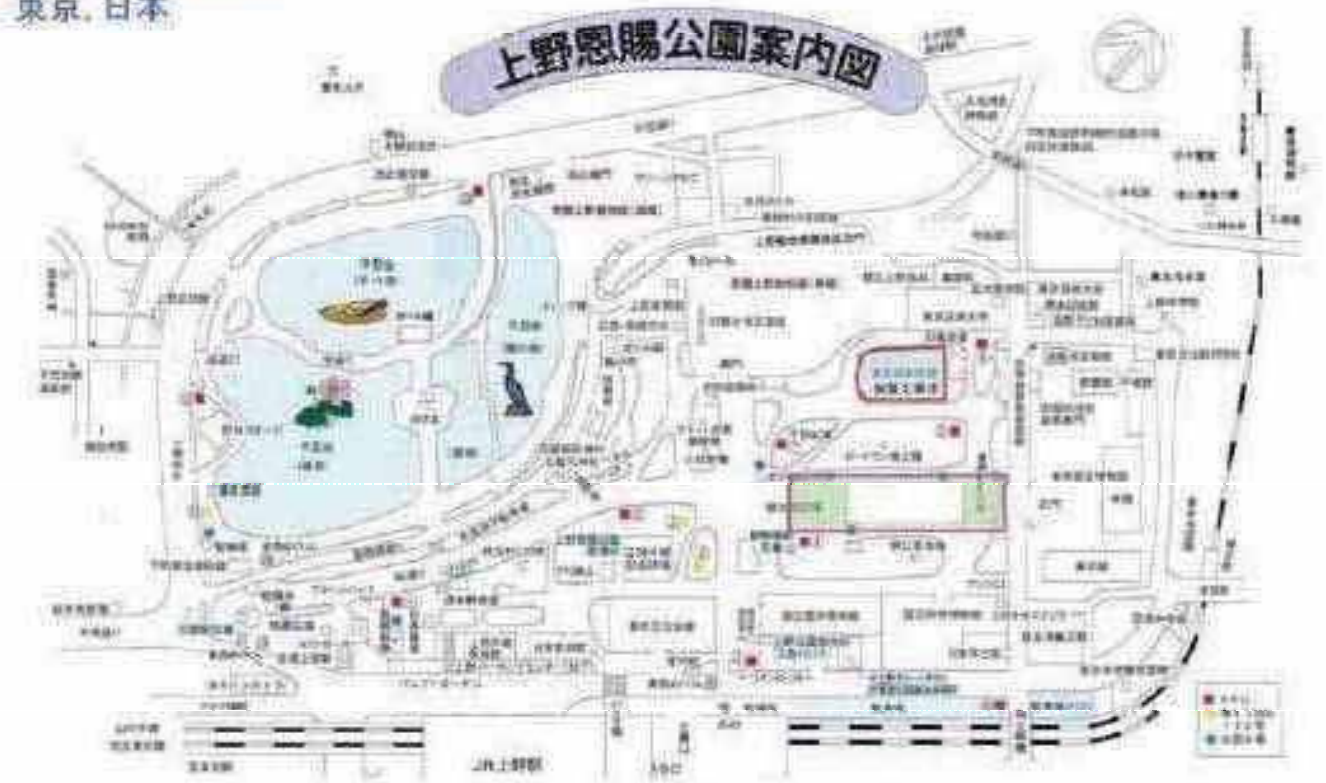
日本の事例  
新宿御苑  
東京, 日本

上野公園とは対照的な、都市のエアポケットのような「憩いの公園」。エリアごとの特徴づけが明確で、多彩な表情を見せる。



日本の事例  
上野恩寵公園  
東京, 日本

四季彩々、「人が集まる」公園としての成功例であり、美術館、博物館、歴史的建築、近代建築が寄り添う日本有数の「文化発信拠点」でもある。

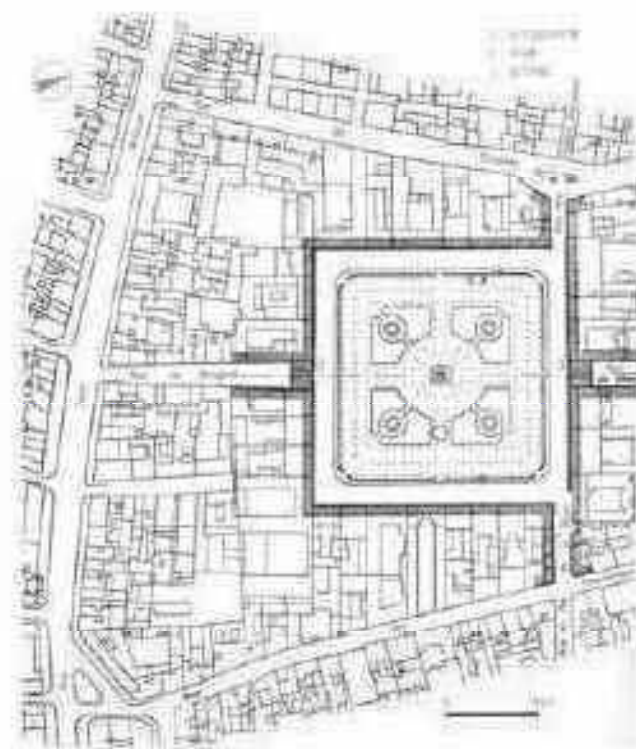




### 歴史的事例

#### ヴォージュ広場 (17c)

都市計画としての公園（広場）活用の歴史的成功例。  
都市軸を形成している。

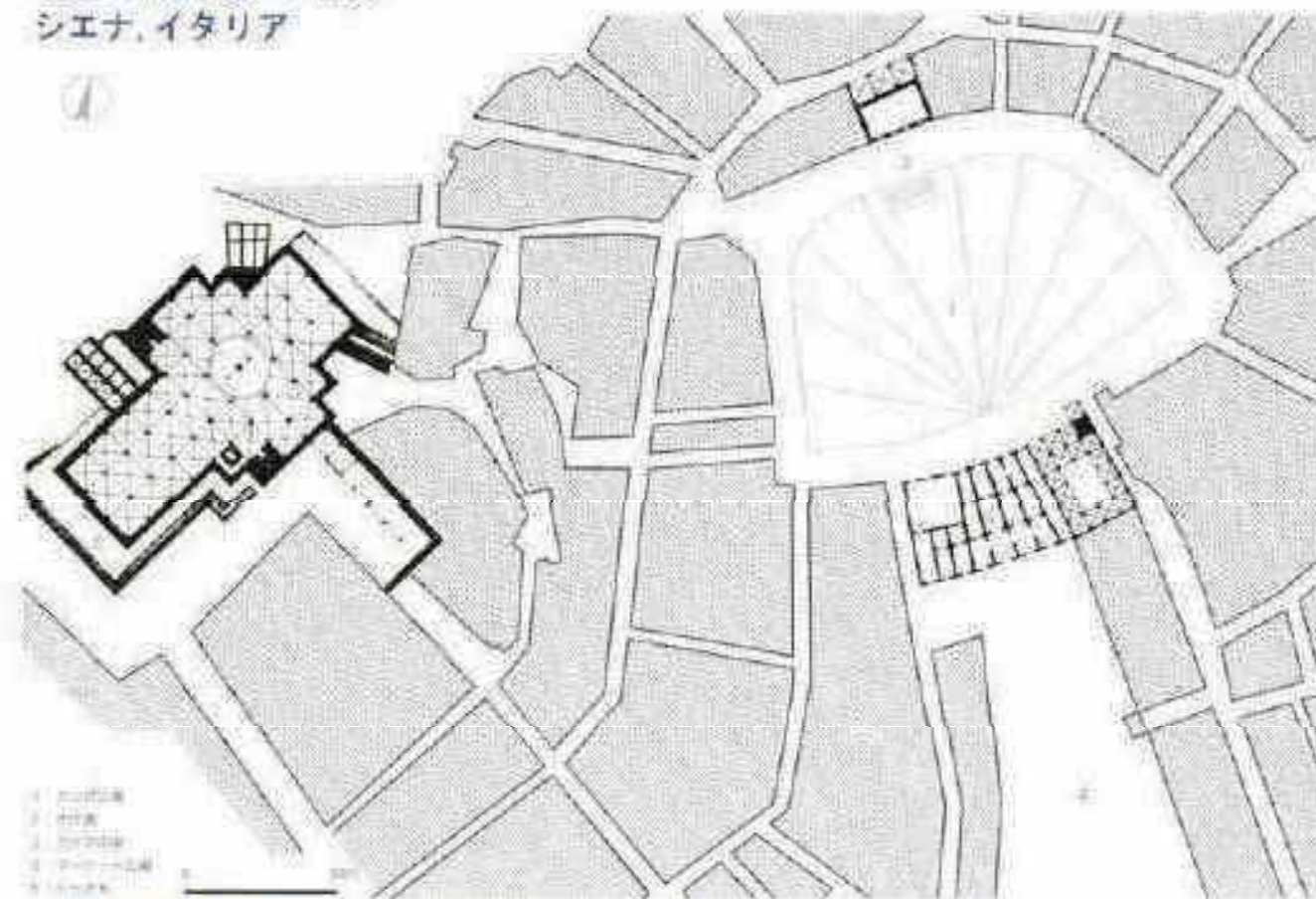


### 歴史的事例

#### カンポ広場 (14c)

シエナ、イタリア

「人が集まる」歴史的公園（広場）。  
典型的な劇場型広場。



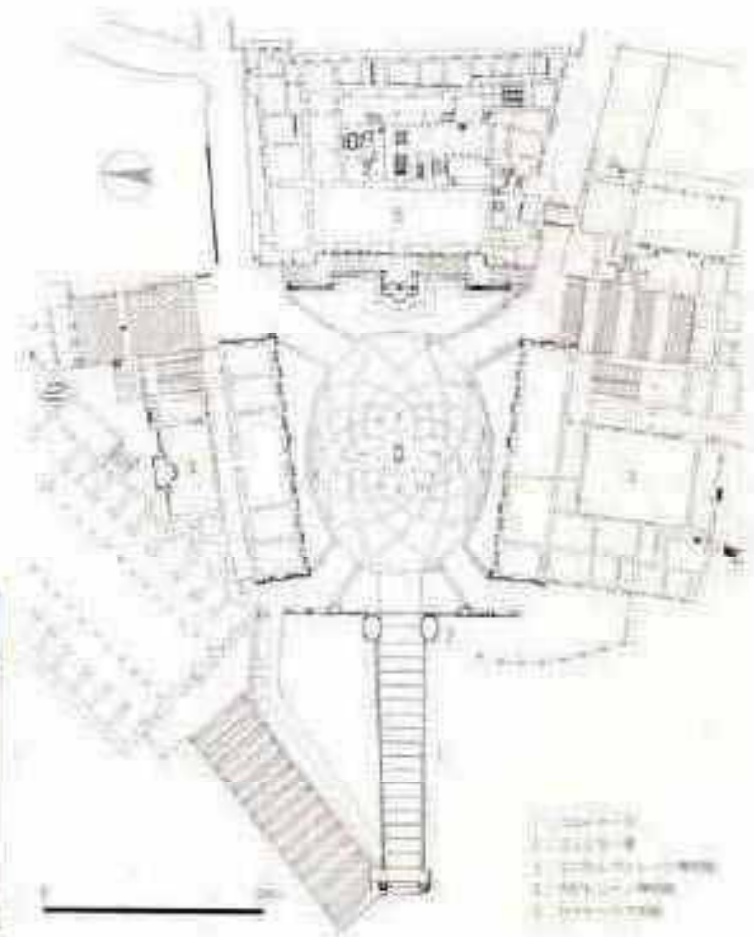


## 歴史的事例

### カンピドリオ広場 (16c)

ローマ、イタリア

世界的に有名な観光名所。都市を俯瞰する劇場型広場であるとともに、都市軸を形成して街並みに影響を与えている。

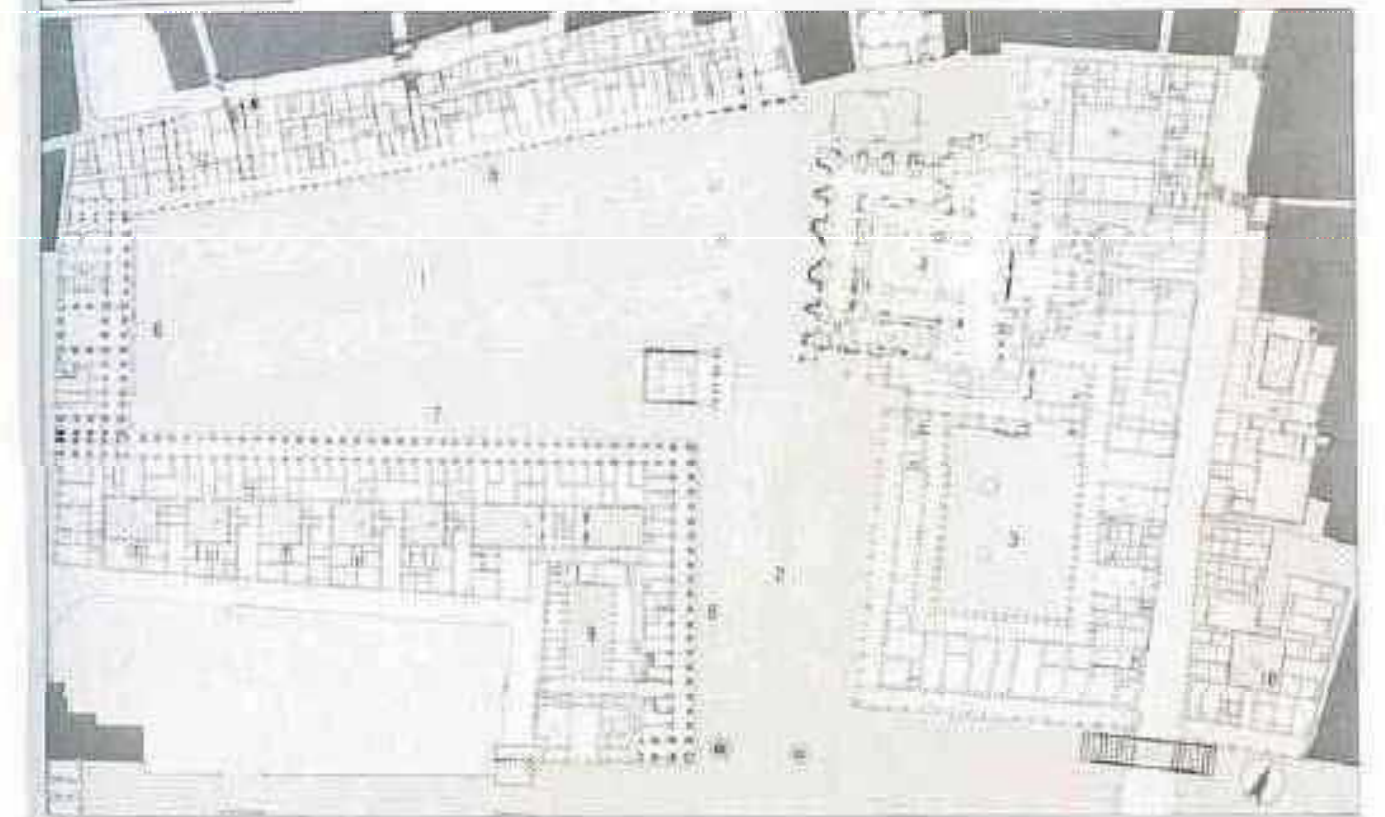


## 歴史的事例

### サン・マルコ広場 (12c)

ヴェネツィア、イタリア

観光と社交の広場。12世紀から段階的に成長して、現在の規模になった。水の都を支える「都市の玄関」でもある。





海外の事例  
カゼルタ宮殿(17c)  
イタリア

強い軸線を持った都市的  
スケールの公園。



海外の事例  
ヴェルサイユ宮殿他  
フランス

言わずと知れた世界的名所。  
幾何学的なモチーフは都市の  
軸線を反映している。



IMAGE



La Granja, Spain (1725)